

唐鈔本古文尚書の本文と訓点の問題

小助川 貞 次

富山大学人文学部紀要第 76 号抜刷

2022 年 2 月

唐鈔本古文尚書の本文と訓点の問題

小助川 貞 次

はじめに

唐鈔本古文尚書の本文と訓点については、内藤虎次郎博士（『旧鈔古文尚書』解題、岩崎文庫、大正8年、以下では内藤虎次郎（1919）とする）、および吉澤義則博士（『岩崎文庫所蔵尚書及び日本書紀古鈔本に加へられたる乎古止点に就きて』、岩崎文庫、大正8年、以下では吉澤義則（1919）とする）によって基本的な枠組みが示され、以後の精密な研究においてもこの枠組みが堅持されてきた。

しかし、本文に関して言えば、唐鈔本とは具体的にどのような素性をもった本文なのか、またどのような態度によって書写されているのか、誤写や誤脱を補訂したのはどの段階なのかということについて、これまでの研究、とりわけ訓点研究の立場からは検討されることはなかった。これは、本書のような唐鈔本に加点された訓点資料の場合、本文（唐代写本）は加点者（日本人）が与り知ることのできない所与のテキストであって、加点とは別次元のものとして扱われてきたからである。一方、訓点に関しても、甲種点、乙種点、角筆点は、これまで同一加点者によるものであるとされてきたが（吉澤義則（1919:214）、小林芳規（1986:269））、特に音注と字体注の書込を見ると、甲種点と乙種点の記入態度はあまりにも差が大きく、甲種点の在り方は他の平安中期の漢籍訓点資料とよく共通するが、乙種点はむしろ平安後期以降の加点資料の特徴とよく一致する。さらに甲種点は巻の途中で加点を止め、乙種点が改めて巻頭から加点し直したとされるが（吉澤義則（1919:214））、それではなぜ甲種点は途中で加点を止めたのかという点についても、これまで明確な説明がなされることはなかった。

本稿はこのような問題について、本文の篇名表示、一行の文字数、書体・字体、隸古字の現れ方などから、漢文本文は少なくとも五筆が区別できることを具体的に示し、その上で甲種点、乙種点の加点者は、このような本文を一体どのように認識していたのかという観点から敦煌文献も参照しながら考えようとするものである。

1. 本文の問題

内藤虎次郎（1919）は、岩崎本（現東洋文庫蔵本）の本文について神田本（現東京国立博物館蔵本）と比較し、岩崎本巻第5と巻第12は神田本巻第6と同一手になるが、岩崎本巻第3は、これらの「手」とは異なることを初めて指摘した¹⁾。唐鈔本古文尚書（以下、他と区別する必要がない場合は単に「唐鈔本」と呼ぶ）には、岩崎本、神田本のほかに九条本（現東山御文庫蔵本）があり、その後、石塚晴通・小助川貞次（2015:157）は唐鈔本全体について、少なくと

も五筆（本稿ではA～Eとする）が区別できることを指摘した。その一覧を根拠となった書誌情報とともに稿末別表「唐鈔本古文尚書対照表」に示す。

この五筆の違いは、唐鈔本が複数の写本を繋ぎ合わせた「取り合わせ本」であったことを示すものであるが、そこに伝本の系統の違いが反映されているかどうかについては実はよく分からない。例えば隸古字の現れ方や隸古字内での異体差を観察すると、確かにある種の傾向は存在するようであるが、五筆の違いとは必ずしも一致しない。（以下の挙例においては、所在を「諸本名＋篇名＋各本の冒頭からの行数」で示すが、岩崎本の場合は諸本名を省略する）

表1 隸古字「其」の字体一覧

	卷第3	卷第5	卷第6	卷第12	小計
	A筆	B筆	B筆	B筆	
𠂔	10	35	3	4	52
𠂔	3	3	9	27	42
其	0	3	1	1	5

調査範囲は卷第3（岩崎本、九条本）、卷第5（岩崎本）、卷第6（神田本）、卷第12（岩崎本）における経文（本行）



図1 禹貢11（A筆）



図2 禹貢18（A筆）



図3 盤庚上53（B筆）

表2 隸古字「厥」の字体一覧

	卷第3	卷第5	卷第12	小計
	A筆	B筆	B筆	
𠂔	59	27	1	87
𠂔	0	5	18	23
厥	0	1	0	1

調査範囲は卷第3（岩崎本、九条本）、卷第5（岩崎本）、卷第12（岩崎本）における経文（本行）



図4 禹貢5（A筆）



図5 罔命373（B筆）

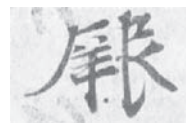


図6 盤庚上50（B筆）

表3 隸古字「辟」の字体一覧

	卷第5	卷第12	小計
	B筆	B筆	
侵	2	3	5
辟	0	6	6



図7 説命上178 (B筆)



図8 呂刑442 (B筆)

調査範囲は岩崎本巻第5, 巻第12における経文(本行)。辟はすべて呂刑篇

同様に唐諱「世」「民」(太宗)を観察しても五筆との関係は見えてこない。

表4 唐諱「世」の字体一覧

		卷第3	卷第5	卷第12	小計
		A筆	B筆	B筆	
世	経文	0	2	9	11
	伝文	1	5	18	24
世	伝文	3	1	0	4

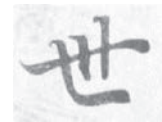


図9 盤庚上83 (B筆)



図10 九条本胤征155 (A筆)

調査範囲は巻第3(岩崎本, 九条本), 巻第5(岩崎本), 巻第12(岩崎本)における経文(本行)・伝文(割注)

表5 唐諱「民」の字体一覧

		卷第3	卷第5	卷第12	小計
		A筆	B筆	B筆	
民	経文	5	30	29	64
	伝文	8	42	56	106



図11 盤庚上47 (B筆)

調査範囲は巻第3(岩崎本, 九条本), 巻第5(岩崎本), 巻第12(岩崎本)における経文(本行)・伝文(割注)

このような字体レベルでの比較に対して, 篇名表示は一つの手がかりになるかもしれない。各篇の冒頭に篇名が記されるが, 篇名の上に「尚書」の二文字が付される場合と付されない場合とがある(稿末別表「唐鈔本尚書対照表」の「篇名表示」欄を参照)。

尚書+篇名・篇次+時代+孔氏伝

篇名・篇次+時代+孔氏伝

前者（「尚書」を付す）は巻第4、巻第5、巻第6、巻第12の諸篇（以上B筆）と巻第13の諸篇（E筆）であり、一方後者（「尚書」を付さない）は巻第3（A筆）、巻第8（C筆）、巻第10（D筆）の諸篇である。岩崎本巻第5（B筆）は盤庚中と説命上では「尚書」が付され、盤庚下、説命中下、高宗彤日、西伯戡黎、微子では「尚書」が付されずに揺れているが、他のB筆はすべて「尚書」を付している。なので本来は同類であったのではないかと推測される²⁾。なお、巻第3（九条本）の篇名に続く篇次は夏書から始まる篇次ではなく、前書の虞書からの通し番号になっていて、本文筆致とともに他巻とは様相が異なる（篇次の右傍に朱点で本来の正しい番号「二」「三」「四」が書き込まれている）。

2. 訓点の問題

一方、唐鈔本の訓点については吉澤義則（1919）以来、多くの先行研究があるが、いずれも吉澤義則（1919:214）の「一人者が盤庚中に至るまで甲種の朱墨を以て加点し、再遡りて、初より乙種の朱墨を追補し、その序を以て盤庚下以下に加点せしものにして、丙種の墨点は鎌倉に加へしものなるべし」という「甲種点・乙種点・丙種点」という基本的枠組みを踏襲・発展させるものであった。後に小林芳規（1967）（1986）は、角筆点の存在を加えた上で、唐鈔本全体のより詳細な加点状態一覧を示したが、丙種点（鎌倉時代）以外は同一人によるものであるとする基本的枠組みは動かなかった³⁾。この基本的枠組みに対して、小助川貞次（2005:89-91）は注釈書の利用の仕方や隷古字の解釈という点から、甲種点と乙種点の間には学問的レベルの違いがあることを指摘したが、全体の枠組みを再考するまでは至らなかった。

いずれにしても、これらの研究によって基本的な加点の種類と順序、仮名点・ヲコト点の詳細、書込注、諸符号等、ほぼすべての加点事象について論じ尽くされたように思われる。しかし、唐鈔本の本文は前節で検討したように、複雑な筆致・書体を持つのであり、平安中期の加点者はこのような本文を一体どのように認識し加点していたのか、甲種点と角筆点・乙種点は同一人が時を異にして加点したものと考えられてきたが、加点の様態もその内容もかなり異なっていて、果たして同一人となすことが適当なのか、また甲種点はなぜ巻末まで加点することなく巻第5盤庚中で加点を止めてしまったのかなど、依然として素朴な疑問が残るのである。

3. 全巻に加点された朱点

甲種朱点は巻第4・仲虺之誥まで（甲種墨点は巻第5・盤庚中まで）加点されているが、唐鈔本全巻に加点された朱点に目を向けると以下の三種類が存在する。

- ・朱声点朱点発（原卓志（1987）・小林芳規（1986）参照）
- ・尚書正義との対応を示す標起止（小助川貞次（2005）参照）
- ・伝文（割注）末尾の助字に対する見消符⁴⁾

これら全巻に加点された朱点は、中国側注釈書の利用（対照作業）及び本文校勘に関するもので日本語を介入させずに加点できる内容である。朱声点に関しては、小林芳規（1986:279）のように「和訓仮名やヲコト点と相補関係にあるのではなく、全巻を通して一度音読した結果を示すもの」とする考え方もあるが、朱声点は陸徳明經典釈文との対照作業・理解に基づくものであるとすれば（原卓志（1987））、やはり日本語（あるいは日本漢字音）は介入しない。これに対して、巻第4・仲虺之誥の途中まで加点されている甲種朱点は、日本語の加点内容を持っている。これらの朱点は加点範囲と加点内容が異なるが、加点プロセス（小助川貞次（2006）（2009））に基づいて考えれば、加点段階に応じた同一（者）の加点と見なすことができる。

加点プロセス

本文校勘 → 朱声点・朱点発（經典釈文）→ 標起止（尚書正義）→ 甲種朱点

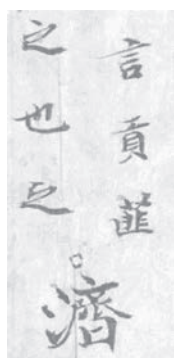


図12 甲種朱点の
見消（禹貢2）

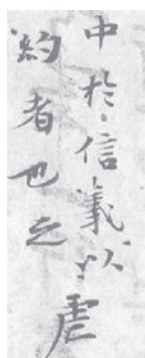


図13 甲種朱点の
見消（呂刑391）

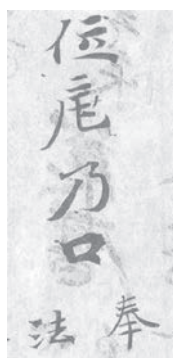


図14 甲種朱点の標起止・
破音・声点（盤庚上94）



図15 甲種朱点の仮名
点・ヲコト点（禹貢9）

ところが、經典釈文に記載されている（いた）隸古字に関する注記（古○字）を引用するのはすべて乙種墨点であるのに対して、甲種朱点が經典釈文から引用するのは大半が音注であって、隸古字に関する注記を引用することはほとんどない（九条本巻第3に若干例あり）。

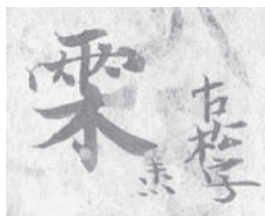


図16 乙種墨点の隸古字注記「古松字」（禹貢15）



図17 甲種朱点の音注注記「勅其」（禹貢14）

朱声点・朱点発の加点は經典釈文に基づくものであり、かつ甲種朱点加点者も經典釈文を参照していることは明らであることからすれば、隸古字に関する注記だけが抜け落ちているのは奇異なことと言わなければならない。甲種朱点加点者には「隸古字に対する関心が無かった」などということは、古文尚書を読解する者の立場としては考え難いからである（甲種朱点の注釈書利用の「深さ」からも否定される⁵⁾）。逆に甲種朱点加点者の隸古字に対する理解力が高く「わざわざ注記をするまでもなかった」とするならば、乙種墨点の隸古字に対する理解力は相対的に低かったことになる（鎌倉時代の丙種点の理解力はまさにそのようなレベルである）。甲種朱点と乙種墨点との違いは、小林芳規(1986:270)が言う「加点方針の変質」に留まらない大きなものであったと考えなければならないのである。

4. 全巻に加点された字音注記

全巻に加点された字音注記は甲種朱点・乙種墨点を含めて岩崎本で140条ほど存する。その出典が改変を伴う以前の原初形經典釈文によるものであることは、沼本克明(1969)によって解明されている。ところが書き込まれている字音注記の様態を見ると、甲種朱点と乙種墨点とはあまりにもかけ離れているように思われるのである。甲種朱点の加点が、本文字画に寄り添うように極小字で書き込まれることについては、すでに小林芳規(1967:722-723)で指摘されているが、甲種朱点による字音注記は、例えば藤井有鄰館藏春秋経伝集解卷第二平安中期点や東洋文庫蔵毛詩平安中期点よりもさらに極小で、一方乙種墨点による字音注記は、例えば春秋経伝集解卷第十保延五年(1139)点や史記呂后本紀・孝文本紀・孝景本紀延久五年(1073)点のような平安後期以降の加点資料とよく一致するのである。



図 18 甲種朱点の字音注記

「沿：悦専」(禹貢 37)

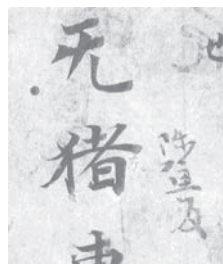


図 19 乙種墨点の字音注記

「猪：陟魚反」(禹貢 19)

もっとも乙種墨点による字音注記を子細に見ると、太い筆致のもの（「箴：之林反」盤庚上 57）と細い筆致のもの（「梟：五達反」盤庚上 53, 「𩇑：波我反」盤庚上 60）が区別でき、一筆で為されたものではないことにも注意しなければならない。

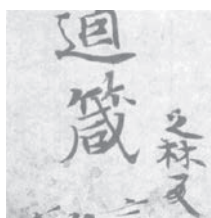


図 20 乙種墨点の字音注記
「箴：之林反」(盤庚上 57)

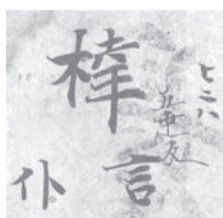


図 21 乙種墨点の字音注記
「桡：五達反」(盤庚上 53)

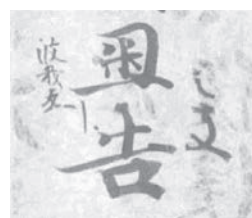


図 22 乙種墨点の字音注記
「𠂔：波我反」(盤庚上 60)

さらに注意しなければならないのは、乙種墨点による字音注記の書込位置が本文右傍に集中する点である。本文右傍の位置は、加點する際に優先される位置であると考えるならば（例えば「左訓」に対する「正訓」の位置として）、このような傾向があるのは、むしろ当然といってもよい。しかしそれでは、甲種朱点による音注が左傍にあり、乙種墨点による音注が右傍にある例はどう考えればよいのか。右傍の位置の方が優先順位が高いと考えるのであれば、「先：乙種墨点 → 後：甲種朱点」となり、唐鈔本の加點順序に関するこれまでの基本的な枠組みが成り立たなくなる。

漆 (岩崎本禹貢 8)：右下乙種墨点「𠂔七」，左傍甲種朱点「七」，朱入声点

楷 (岩崎本禹貢 45)：右傍乙種墨点「音戸」，左傍甲種朱点「戸」，朱去声点

明 (九条本禹貢 6)：右傍乙種墨点「音孟」，左傍甲種朱点「孟」，朱去声点

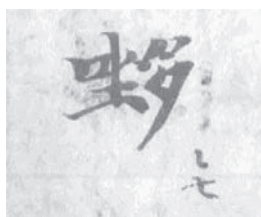


図 23 「漆」(禹貢 8)

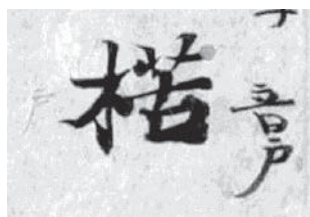


図 24 「楷」(禹貢 45)

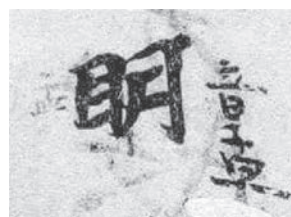


図 25 「明」(九条本禹貢 6)

ただし、甲種朱点による音注は本文右傍が空白であっても左傍に加點される例もあり、甲種朱点は書込位置が比較的自由であったと考えることもできる。もしそうであれば、甲種朱点と乙種墨点との加點態度の違いは、やはり相当に大きいことになる。

夭 (岩崎本禹貢 31)：左傍甲種朱点「於嬌長也」，朱上声点

糲 (岩崎本禹貢 35 割)：左傍甲種朱点「便善」，上欄甲種朱点「梗」，朱平声軽点



図 26 「天」(禹貢 31)

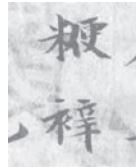


図 27 「梗」(禹貢 35 割)

5. 本文校勘

本文校勘に関するものとしては、見消と補入が存する。岩崎本で見ると、見消には伝文(割注)の左右文字数の体裁を整えるために割注左行末尾に配置されたダミーの文末助字に対して、字画中に縦短線を朱点で加点するものが33例(注4参照)、衍字に対して右傍に墨点二点を加点するもの14例⁶⁾が全巻に亘って存する。衍字に対する見消は平安中期の加点以前にすでにあったと見なしてよいであろう。

脱字に対する補入は、岩崎本で見ると朱点では3例あり、いずれも巻第3禹貢(9割「桑」、12割「其」、45割「麻」)に限られるので⁷⁾、甲種朱点によるものと見なされる。一方、墨点による補入は、岩崎本で43例あり(丙種点を除く)、全巻に亘って存する⁸⁾。衍字に対する見消と同様に平安中期点の加点以前にあったものと考えられそうであるが、一方で甲種朱点による補入があることや、加点プロセス(小助川貞次(2006)(2009))に基づいて考えるならば、乙種墨点による校勘作業の結果と考えることもでき、この判断は非常に難しい。この補入処置に関する問題を考える上で、岩崎本・神田本・九条本のそれぞれに存する以下の補入箇所は、敦煌本古文尚書⁹⁾でも同様の補入処置が為されており、本文校勘の問題を考える上でヒントになる。

[岩崎本]

- ・盤庚上 81：言人惟 +{ 求 } 舊 → P.2643 (18)：言人惟 +{ 求 } 舊
- ・説命下 214 割：非 +{ 説 } 所聞 → P.2643 (184)：非 +{ 説 } 所聞
- ・微子 279：我罔爲 +{ 臣 } 僕 → P.2643 (267)・P.2516 (187)：我罔爲 +{ 臣 } 僕

經典釈文：一本無臣字



図 28 盤庚上 81 と
P.2643 (18)

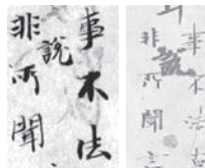


図 29 説命下 214 割と
P.2643 (184)

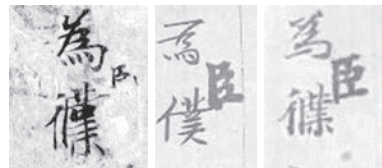


図 30 微子 279 と
P.2643 (267)・P.2516 (187)

[神田本]

- ・牧誓 (87 割) : 旄 +{ 示 } 有事於微也 → S.799 (42) : 旄 +{ 示 } 有事於教

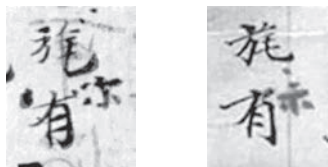


図 31 牧誓 87 割と S.799 (42)

[九條本]

- ・胤征 147 割 : 義氏和氏 +{ 世 } 掌天地四時之官 → P.2533 (78) : 義氏和氏 +{ 世 } 掌天地四時之官,
P.3752 (5) : (義氏) 和氏代掌天地四時之官
- ・立政 567 割 : 言皇天 +{ 無 } 親 +{ 佑 } 有德也 → P.2630 (50) : 言皇天 +{ 無 } 親 +{ 祐 } 有德也

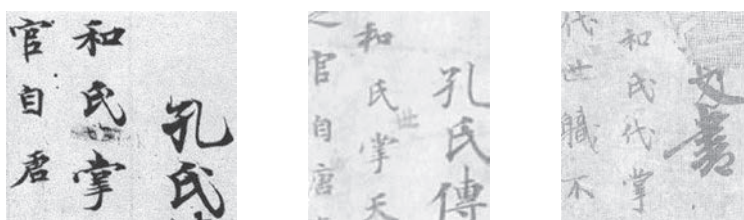


図 32 胤征 147 割、P.2533 (78)、P.3752 (5)

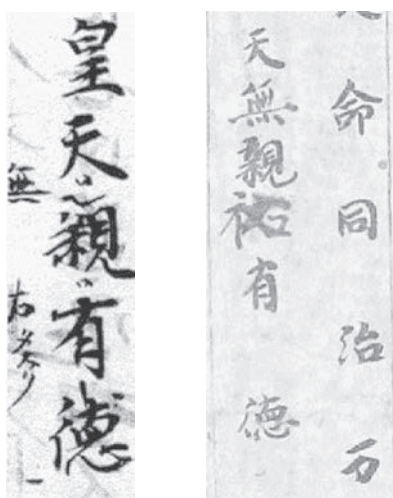


図 33 立政 567 割、P.2630 (50)

これらの例を含めて、唐鈔本における墨点補入がすべて平安中期点の加点者による処置だとすれば、元来の唐鈔本の本文は、補入処置がなされる前の敦煌本と類似する本文を持つことになる。さらにそれだけにとどまらず、平安中期点の加点者の手元には敦煌本が補入処置に用いたのと同様の校勘材料があったことにもなる（岩崎本微子 279 における經典釈文「一本無臣字」の記載内容との一致など）。逆に、平安中期点の加点者が手にした所与のテキストに、すでに補入処置がなされていたとするならば、甲種朱点によると見なした伝文（割注）末尾助字の見消や補入処置、あるいは隸古字に対する字体注記の中にもそのような所与の状態があったのではないかと思われるのである。先に示した本文右傍に書き込まれた乙種墨点の字音注記の内、特に左傍に甲種朱点による音注を持つ「楷」（禹貢 45）、「漆」（禹貢 8）、「明」（九条本禹貢 6）などの例は、実はそのように考えると説明がしやすいのである¹⁰⁾。

6. まとめ

訓点資料を目の前にするとき、日本語資料として訓点を理解しようとするあまり、漢文本文のあり方と訓点とは区別して考えがちになる（白文の漢文本文に日本語による加点がなされていくプロセスから日本語の部分のみを抽出し利用しようとする方向性とも言える）。唐鈔本古文尚書は本文の複雑な状態に対して、甲種点、角筆点・乙種点（あるいは丙朱点）がさらに複雑に加点されている資料であり、日本語訓点資料として解読するには大きな困難が伴う。これまでは、甲種点、乙種点（角筆点）を平安中期の同一加点者によるものであるという前提に立ち、その基本的な枠組みの中で加点事象を捉えようとしてきたのであるが、この枠組みを一度解き放してみたらどうなるか。甲種点が盤庚中までで加点を止め、角筆点・乙種点が最初に戻って加点し直した理由や、甲種点と乙種点との加点態度や加点内容の違いをもっと合理的に解釈できるような気がするのである。当初設定した問題の解決には至らなかったが、解決への道筋が見えてきたするならば、本稿での責は果たせたのではないかと思う。

注

- 1) 審其書法・第五第十二兩卷・實與神田香巖君藏尚書殘卷・同出一手・第三卷自屬別手・但其並爲初唐人手筆・紙背寫元秘鈔・則皆同・（句切は稿者による）
- 2) 敦煌本においては卷第 5 を有する P.3670, P.2516, P.2643 は篇名に「尚書」を付すが、卷第 3 を有する P.2533 でも篇名に「尚書」を付し、卷第 6 を有する S.8464 では「尚書」を付さないなど、唐鈔本とは一致しない。〔尚書を付す〕P.3615（禹貢、「孔氏伝」を記さない）、P.2533（禹貢（卷首欠損）、甘誓～胤征）、P.3670（盤庚上（卷首欠損）、盤庚中）、P.2516（盤庚中（卷首欠損）～微子）、P.2643（盤庚上（卷首欠損）～微子）、S.0799（泰誓下×、牧誓・武成、いずれも「孔氏伝」を記さない）、S.2074（蔡仲之命（卷首欠損）～立政）、P.2630（多方（卷首欠損）・立政、「孔氏伝」を記さない）、P.2980=3871（費誓（卷首欠損）・秦誓）。〔尚書を付さない〕P.3015（堯典（卷首欠損）・舜典）、S.8464（泰誓）、P.2748（洛誥（卷首欠損）～蔡仲之命（君奭・蔡仲之命は尚書を付す）、S.6259（蔡仲之命（卷首欠損）・多方）。

- [不明(篇名欠損)] P.4900, S.0801, S.5745, P.3605, P.3469, P.3169, P.4033, P.3628, P.4874, P.5543, P.3752, P.5557, S.6017, S.5626, P.3767, P.4509。なお S.2074, S.6259, S.0801, S.5745, S.6017, S.5626 以外のスタイン文献は IDP で、ペリオ文献は Gallica で電子画像が公開されている。電子画像が公開されていない S.2074, S.6259, S.0801, S.5745, S.6017, S.5626 は『英藏敦煌文献』または『敦煌宝藏』で写真版が閲覧できる。
- 3) ただし小林芳規(1967)(1986)は、甲種点と乙種点は加点態度に違いのあることや、省画仮名の使用状態から乙種点の方が新状態を示しているということを指摘している。
- 4) 岩崎本に限定すると以下の 33 例(いずれも割注内)が確認できる。(禹貢) 2 也, 2 也, 2 之, 2 也, 2 之, (盤上) 72 之, (盤下) 153 之, (説下) 208 之, (高宗) 37 之, 238 之, 241 之, (西伯) 252 之, (微子) 263 之, 270 乎, 280 之, (畢命) 307 之, (冏命) 356 之, 356 哉, 367 之, (呂刑) 391 約, 391 者, 391 之, 393 者, 393 矣, 393 之, 393 者, 393 哉, 413 者, 423 者, 433 之, 433 者, 447 之, 467 之。
- 5) 小助川貞次(2005:89-91), 石塚晴通・小助川貞次(2015:158-159) 参照。
- 6) (禹貢) 22 惟, 22 貢, (盤中) 119 (割) 先, (説上) 161 (割) 曰, (説中) 204 (割) 罷, (説下) 219 (割) 刈, (微子) 261 (割) 順, (畢命) 301 (割) 福, (君牙) 337 (割) 大, (君牙) 339 (割) 日, (冏命) 363 僕, (呂刑) 383 (割) 年, (呂刑) 396 除, 412 充。
- 7) 朱点による補入は巻第 12 呂刑にもう一例あるが(472 割「之」), 巻第 3 の補入とは筆致が異なる。
- 8) 墨点による補入は以下の通り。(禹貢) 1 (割) 石, 1 (割) 海, 7 (割) 州, 7 (割) 州, 15 (割) 之, (盤上) 52 (割) 女, 57 王, 59 (割) 上, 67 施, 75 (割) 於, 79 (割) 可, 81 求, 88 (割) 之, (盤中) 119 (割) 我, 121 (割) 曰, 126 乃, 126 々(乃), 129 子, 129 孫, 130 我, 136 邑, (盤下) 146 (割) 立, 148 (割) 以, 155 (割) 貨, 155 (割) 進, (説中) 200 (割) 之, (説下) 214 (割) 説, 225 (割) 者, 229 (割) 答, (微子) 279 臣, (畢命) 286 天, 287 (割) 天, (君牙) 328 (割) 以, 341 (割) 其, 344 (割) 以, (冏命) 371 (割) 人, 375 (割) 於, (呂刑) 388 并, 399 (割) 无, 414 天, 415 刑, 426 (割) 在, 438 (割) 賂。
- 9) 敦煌本古文尚書の書写年代と加点内容はそれぞれ以下の通り。
P.2643: 乾元 2 年(759) 書写奥書, 句読と破音(Ⅰ型/Ⅰ'型/Ⅱ型/Ⅳ4型/V型), S.799: 7 世紀末～8 世紀初写, 句読と破音(Ⅲ型/Ⅳ型/V型), P.2533: 8 世紀初写, 句読と破音(Ⅱ型), P.3752: 8 世紀前中期写, 句読と破音(Ⅳ型), P.2630: 8 世紀中期写, 句読と破音(Ⅳ型)。
- 10) 敦煌本では本文に対する音注は紙背に置かれることが多く(毛詩: P.2669・S.10, 春秋経伝集解: P.2540・P.3729 など), 唐鈔本の書込音注の一部分が, 10 世紀加点以前にすでに存したとは考え難い点もあるが, 敦煌本でも本文そのものに音注を書込む例が全く無いわけではない(尔雅: P.2661, 晋書載記: P.3813, 尚書序文: P.4900, 文選: S.3663 など)。また古文尚書: P.3871(8 世紀前期写)では隸古字に対して朱筆による楷書注記(誓無有哉謀忌云猷罔愆旅卑詞其容懷由)がある。

使用テキスト・データ

[唐鈔本] 岩崎本は『東洋文庫善本叢書』7(勉誠出版, 2015 年)及び原本調査時のメモ, 神田本は『容安軒旧書四種』(神田喜左衛門, 1915 年), e 国宝画像(<https://emuseum.nich.go.jp/>)及び原本調査時のメモ, 九条本は『京都帝国大学文学部景印旧鈔本第十集』(京都帝国大学文学部, 1942 年)及び築島裕先生移点資料による。[敦煌本] スタイン本は『英藏敦煌文献』(四川人民出版社, 1990 年～1995 年), IDP 画像(<http://idp.bl.uk/>)及び原本調査時のメモ, ペリオ本は『法藏敦煌西域文献』(上海古籍出版社, 1995 年～2005 年), Gallica 画像(<https://gallica.bnf.fr/accueil/en/content/accueil-en?mode=desktop>)及び原本調査時のメモによる。[データ] 岩崎本, 神田本については全本文を入力した Excel データ, 九条本はテキスト・データを用いた(いずれも稿者作成データ)。

参考文献

- 内藤虎次郎（1915）：『容安軒旧書四種』（神田信暢，1919年）解題（題名無し。後「神田氏藏古鈔尚書跋」
として「寶左齋文」（1913年）の一篇として纏められ、『内藤湖南全集』14（5-7頁，筑摩書房，1976年）
に収録される。本稿では初出に拠る）
- 内藤虎次郎（1919）：『旧鈔古文尚書』（岩崎文庫，1919年）解題（題名無し。後「岩崎男藏古鈔尚書跋」
として「寶左齋文」（1913年）の一篇として纏められ、『内藤湖南全集』14（7-8頁，筑摩書房，1976年）
に収録される。本稿では初出に拠る）
- 吉沢義則（1919）：「岩崎文庫所藏尚書及び日本書紀古鈔本に加へられたる乎古止点に就きて」（岩崎文庫，
引用は『国語国文の研究』（岩波書店，1927年）に拠る）
- 岩崎文庫（1919）：『旧鈔古文尚書』
- 小林芳規（1967）：『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』（東京大学出版会）
- 沼本克明（1969）：「古文尚書平安中期点の字音注記の出典について」（『国語学』78，→『平安鎌倉時代
に於る日本漢字音に就ての研究』（武蔵野書院，1982年））
- 石塚晴通（1983）：「岩崎本古文尚書・毛詩の訓点」（『東洋文庫書報』15）
- 小林芳規（1986）：「唐鈔本尚書の平安中期訓点について」（『神田喜一郎博士追悼中国学論集』，二玄社）
- 原卓志（1987）：「古文尚書平安中期点における朱声点・点発について」（『広島大学文学部紀要』46）
- 東洋文庫（1990）：『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅰ』
- 小助川貞次（2005）：「尚書正義との関係から見た古文尚書平安中期点の問題」（『日本学・敦煌学・漢文訓
読の新展開』，汲古書院）
- 小助川貞次（2006）：「訓点資料が出来上がるプロセスについて」（『訓点語と訓点資料』117）
- 小助川貞次（2009）：「東アジア学術交流史としての漢文訓読」（『富山大学人文学部紀要』51）
- 石塚晴通・小助川貞次（2015）：「古文尚書解題」（『東洋文庫善本叢書』7，勉誠出版）

附記・謝辞

本稿は第114回訓点語学会研究発表会（2016年5月22日，京都大学）における口頭発表原稿をもとに，
その後の調査研究を踏まえて改稿したものであり，JSPS 科研費 21K00544 及び大学共同利用機関法人人間
文化機構国立国語研究所「共同利用型」研究「訓点資料の精密解読によるデジタルアーカイブの検証」の
助成を受けた研究成果の一部でもある。原本調査においては東洋文庫，東京国立博物館，大英図書館，フ
ランス国立図書館から格別なる御高配を賜り，また石塚晴通名誉教授には終始御助言を賜った。記して深
甚の謝意を申し上げる。

唐鈔本古文尚書の本文と訓点の問題

唐鈔本古文尚書対照表

行数 b:broken (欠損) e:end (巻篇末存) 加點欄の内、「対照符号」以外は小林芳規(1986)による

	通篇	巻篇	篇名	分蔵状態	篇名表示	書体	經文字数	注文 文字数	加點					
									甲種点	角筆点	乙種点	丙種点	対照符号	破音/声点
			序文	(欠)										
虞書	1	1-1	堯典	(欠)										
	2	1-2	舜典	(欠)										
	3	2-3	大禹謨	(欠)										
	4	2-4	皋陶謨	(欠)										
	5	2-5	益稷	(欠)										
夏書	6	3-1	禹貢	岩崎本 b1-46b/ 九条本 1-97e (欠)		A	14-16	18-22	朱	角/(不見)	墨		朱	朱
	7	3-2	甘誓	九条本 98-111e	第七 夏書二 孔氏傳	A			朱	角	墨		朱	朱
	8	3-3	五子之歌	九条本 112-145e	五子之哥第八 夏書 孔氏傳	A			朱	角	墨		朱	朱
	9	3-4	胤征	九条本 146-190e	胤征第九 夏書 孔氏傳	A			朱(前半)	角	墨		朱	朱
商書	10	4-1	湯誓	九条本 b191-213e	(欠)	B	17-18	22-24	朱	角	墨/橙		朱	朱
	11	4-2	仲虺之誥	九条本 214-244b	尚書仲虺之誥第二 商書 孔氏傳	B			朱/墨	角	墨/橙		朱	朱
	12	4-3	湯誥	(欠)										
	13	4-4	伊訓	(欠)										
	14	4-5	太甲上	(欠)										
	15	4-6	太甲中	(欠)										
	16	4-7	太甲下	(欠)										
	17	4-8	咸有一德	(欠)										
	18	5-9	盤庚上	岩崎本 b47-95e (欠)		B	18-19	24-27	墨	角	墨		朱	朱
	19	5-10	盤庚中	岩崎本 96-138e	尚書盤庚中第十 商書 孔氏傳	B			墨	角	墨		朱	朱
	20	5-11	盤庚下	岩崎本 139-158e	盤庚下第十一 商書 孔氏傳	B				(不見)	墨		朱	朱
	21	5-12	說命上	岩崎本 159-183e	尚書說命上第十二 商書 孔氏傳	B				(不見)	墨		朱	朱
	22	5-13	說命中	岩崎本 184-204e	說命中第十三 商書 孔氏傳	B				(不見)	墨		朱	朱
	23	5-14	說命下	岩崎本 205-229e	說命下第十四 商書 孔氏傳	B				(不見)	墨		朱	朱
	24	5-15	高宗彤日	岩崎本 230-241e	高宗彤日第十五 商書 孔氏傳	B				(不見)	墨		朱	朱
	25	5-16	西伯戡黎	岩崎本 242-257e	西伯戡黎第十六 商書 孔氏傳	B				(不見)	墨		朱	朱
	26	5-17	微子	岩崎本 258-283b	微子第十七 商書 孔氏傳	B				(不見)	墨		朱	朱
周書	27	6-1	泰誓上	神田本 b1-30e (欠)		B	17-19	24-28		角	墨		朱	朱
	28	6-2	泰誓中	神田本 31-57e	尚書泰中第二 周書 孔氏傳	B				角	墨		朱	朱
	29	6-3	泰誓下	神田本 58-80e	尚書泰誓下第三 周書 孔氏傳	B				角	墨		朱	朱
	30	6-4	牧誓	神田本 81-106e	尚書牧誓第四 周書 孔氏傳	B				角	墨		朱	朱
	31	6-5	武成	神田本 107-137b	尚書武成第五 周書 孔氏傳	B				角	墨		朱	朱
	32	7-6	洪範	(欠)										
	33	7-7	旅獒	(欠)										
	34	7-8	金縢	(欠)										
	35	7-9	大誥	(欠)										
	36	7-10	微子之命	(欠)										
	37	8-11	康誥	九条本 b245e		C	19-22	26-29			墨		朱	朱
	38	8-12	酒誥	九条本 246-308e	酒誥第十二 周書 孔氏傳	C				(不見)	墨		朱	朱
	39	8-13	梓材	九条本 309-334e	梓材第十三 周書 孔氏傳	C				角	墨		朱	朱
	40	8-14	召誥	九条本 335-399e	第十四 周書 孔氏傳	C				角	墨		朱	朱
	41	9-15	洛誥	(欠)										
	42	9-16	多士	(欠)										
	43	9-17	無逸	(欠)										
	44	10-18	君奭	九条本 b400-435e (欠)		D	17-19	23-28		(不見)	墨	朱/墨	朱	朱
	45	10-19	蔡仲之命	九条本 436-466e	蔡仲之命第十九 周書 孔氏傳	D				角	墨	朱/墨	朱	朱
	46	10-20	多方	九条本 467-543e	多方第廿 周書 孔氏傳	D				角	墨	朱/墨	朱	朱
	47	10-21	立政	九条本 543-609e	立政第廿一 周書 孔氏傳	D				角	墨	朱/墨	朱	朱
	48	11-22	周官	(欠)										
	49	11-23	君陳	(欠)										
	50	11-24	顧命	(欠)										
	51	11-25	康王之誥	(欠)										
	52	12-26	畢命	岩崎本 b284-325e (欠)		B	17-18	23-26		(不見)	墨	墨	朱	朱
	53	12-27	君牙	岩崎本 326-349e	尚書君牙第廿七 周書 孔氏傳	B				(不見)	墨	墨	朱	朱
	54	12-28	冏命	岩崎本 350-376e	尚書冏命第廿八 周書 孔氏傳	B				(不見)	墨	墨	朱	朱
	55	12-29	呂刑	岩崎本 377-379e	尚書呂刑第廿九 周書 孔氏傳	B				(不見)	墨	墨	朱	朱
	56	13-30	文侯之命	九条本 b610-636e (欠)		E	14-17	23-26		(不見)	墨	墨	朱	朱
	57	13-31	費誓	九条本 637-662e	尚書費誓第卅一 周書 孔氏傳	E				(不見)	墨	墨	朱	朱
	58	13-32	秦誓	九条本 663-691e	尚書秦誓第卅二 周書 孔氏傳	E				(不見)	墨	墨	朱	朱
			卷末目次	九条本 692-711e		E							朱数字	

